性的理想郷の基盤と機能

ミッシェル・マフェゾリ

デュルケームは、その学識において並ぶ者なく、その考察はその動機と実証主義者の主張の枠を超えていたが、彼は宗教が何よりもすぐれて社会的事象であることを示した。

彼の『宗教生活の原初形態』についての著作には、この点を裏づける考察と例示がたくさんある。信徒の集会が示す興奮状態は、民衆の祝祭の自然な状況に反しており、その宗教的セレモニーは規範を犯したいという欲求に基盤を置いている。そしてデュルケームは注釈として、それは「とりわけ性的事柄について」いえることであると付け加えている。

デュルケームの、より慎重な表現でいえば、こうした宗教が発展しているのは、喧騒の儀礼が(その機能からいって想像力が不可欠であるが)、社会的構造化の中で「無視できない一つの役割を演ぜずにはいない」ことのあらわれである。

同様に、彼の祭りについての長い古典的記述は「あらゆる抑制から解き放たれた情動」の亢進と、そのため叫喚と怒号、耳を聾する騒音を引き起こすことを述べている。この解放された情動は何ものによっても止められず、

そのため、男女は「性的交際を司っている規範にそむいて関係をもつ。男たちは、妻を交換し合い、ときには近親相姦も……露骨に、罰せられることもなく行われる」。

このような祭りがさらにたけなわになると「ウルウル族は彼らの妻をつれてきて、キンジッリ族に渡し、後者は彼女たちと関係した」(『同書』岩波文庫上巻三九一ページ)。全てこうしたセレモニーは、暴力と残忍さの雰囲気の中で起こるのであるが、集団的興奮が一種の保護幕の役を果たしている。

興味ぶかいことは、この祭典、性的熱狂が日常生活への〝電気ショック療法〟になっていて、何らかの意味を与えているということである。このような酒神祭が、日常生活という詩にあって、対位法的分節の働きをしているのである。日常生活の平凡さが根ざしているその下には、ひそやかな激情が渦巻いており、それは聖なるものとして特徴づけられるものでもある。したがって性的解放について考察することは決して付随的なことでなく、明らかに重要な、独自の効力をもっているのである。デュルケームのノートにあるように、この重要性はトーテムの動物に見られ、それはとりわけ日常生活の守り神であるとともに、同一化の手段であり、社会構造の支えでもある。男と女がそれぞれのトーテム動物をもっており、それはさらに各個人によって特殊化し、特別なものとなっていく。このトーテムを侮辱したり犯したりすれば、激しい争いとなり、ときには血を見る事態になりかねない。

こうした争いについて述べたなかで、たとえばクルネ族にあっては、争いが結婚によって終息することがあると指摘しているのは面白い。この残酷な性の呼びかけ、攻撃的な振る舞いによってあらわされる性の呼びかけは、街や村の若い衆の殴り合いがしばしば仲よしの一党を作るという現象を思い起こさせる。これは「殴り合うのは下司の遊び」という庶民の隠語だけが説明できるもので、異性間であれ同性間であれ性的混乱が、大なり小なり軽薄な動機のもとで起こると、しばしば、控え目な表現でいっても、残虐性と愛との器官的ドラマ、つまり死と生とを伴う性的行為に到達することは確かである。

性の宗教的、日常的解放のなかには、ディオニソス的神秘主義が横たわっており、そこには死と残虐性、暴力、感覚をかりたてるものがあるが、これらは全て、破壊と建設の遊びの原型の中に融け込んでいるものなのである。神秘主義の歴史を見ると、いかにこれらの様々な要素を配分することによって、その生命と思想を構築しているかが、よく分かる。「相反するものの合致」Coïncidentia oppositorum である。

こうした観点から〝去勢〟という習慣の性的・神秘的残虐性を見ると、極めて興味ぶかい。シャルル・アンシオンの「宦官論」によると、神に捧げられる去勢者は、つねに極めて美しい青少年たちである。神聖な仕事に専念するためには、特別な資質、愛の芸術に役立つ資質が必要であった。この習慣は、ニケア公会議で反対決議がされたにもかかわらず、キリスト教会にも及んだのである。

オリゲネスは、福音書の教えにかなうためには去勢することが正しいと主張した。彼以後、教会史の中に、自らの性器を神に捧げた様々な宗派が見られた。そこには性と神秘主義との間にある緊密な関係がうかがわれるのである。それは、長い歴史をかけて、多様な表われ方を示してきた。教会の歴史を通じて、定期的にそれが再発しているのが分かる。

時には、この神秘的で残酷な贈り物も〝より穏当な〟形態をとることがある。トゥールのグレゴワールは美しい娘と結婚したクレルモンの元老院議員の物語を伝えている。彼が彼女の身体を求めた時、彼女は、自分の肉の悦びを絶つ誓いを立てたことを述べて拒絶し、それを押し通した。「以来、二人は何年も同衾しながら、純潔の誓いを守り通した」。そして、この神秘的な妻が死んだ時、この名士は「主なる神よ、私は、あなたから預ったままの完璧な姿で、この宝をお返しすることについて、感謝を捧げる」と、その葬儀で述べるのである。

「宦官論」は、これと似たたくさんの話を伝えている。問題となっている、感情の亢進した純潔は、まさにディオニソス的本質をもったものである。ここでの禁欲は、快楽と戦慄を引き起こす、裏返しのバッカス祭である。

R・ムジルの小説「特性のない男」の中でクラリスは〝つねに英雄であるとともに少女でもある〟のだが、男は彼女に愛と理想を示そうとして、快楽を犠牲にしている。「クラリスは、夫がワグナーを演奏している時は、何週間も彼を拒んだ」。そこではまた、愛の緊張、感受性豊かな魂の激しさが禁欲と英雄的な緊張を引き起こしている。しかし、クラリスが、このようにして、欲求を満たしていたことは確かである。

聖なる全体との神秘的結合を求めるのは、人類に共通の心である。その聖なるものの代用品にたとえば音楽がなることがあるにせよ、である。ギリシャ神話には、不死の存在と無常の人間との多くの結合を通じて、極めて詳細にこのことが示されている。天空と大地、ウラノスとゲアの最初の結合は、この点で、一つの完成されたモデルといえる。

教会年代記が伝えている数えきれないほどの神秘的情熱の事例をたどると、聖ベルナールがかくも明快にしている処女マリア(処女にして母なる)と僧達との純潔かつ実直な関係をあらわしているのが、カソリック教会の独身聖職者であることが分かる。

アヴィラの聖女テレーズは、性のそうしたエロチックな昇華の例の代表である。その人生、書いた物、行動は全て、完全に官能的情動の痕跡を示している。その激しく神秘的な純潔は、あらゆる点でバッカス的である。ベルニーニ作の、ローマのサンタ・マリア・デラ・ヴィクトリア教会にあるその全身像は、恍惚の境をあらわしており、それはまさにバロック芸術がその異教信仰を際立たせている愛の失神に他ならない。

このようなディオニソス的神秘主義は、今も見られるところである。私自身、やや通常でない状況においてであったが、南西フランスの隠遁修道女の極めて厳格な修道院で、女子修道院長が、選ばれた小さなサークルで、その修道院の創設者が前述のような恍惚状態に陥いったときの光景を話すのを聞くことができた。話している院長は、約百人の修道女の長で、しっかりした理性的な婦人であった。その創設者の恍惚状態は、彼女が自ら眼前にしたもので、創設者はその死に臨んで、決して独自でもなかったこの体験が人々に伝えられるよう切望したの

であった。

恍惚者とその愛の至高の対象とを結ぶ黄金の糸、その神秘的交接に伴う附随的表示、またその社会的性質、これらは、神秘的・悲劇的酒神祭を再演する古代の神との婚姻を思い起こさせる。その装飾は、両者の関係の強さをあらわしているのであるが、十五年以上経っても、このエピソードについて考えるたびに、ジョルジュ・バランディエがバッカス祭について分析して述べている〝不安感〟を実感させるのである。

この種の経験は、多くの形をとってあらわれるものであり、現代の多様な神秘主義の中にもまた深く根をおろしていることは確かである。しかしながら、ここで問題にしている神秘主義がバッカス祭的なものである以上、それは単純な個人的経験を超越したもので、集団的に表われるものであることをはっきりさせておく必要がある。詩がうたわれれば、著者はどうでもよいのである。芸術家と同じく、神秘家は神の言葉を伝えるのであって、神は「彼らの魂を奪い、自分のために働かせる……語っているのは神であり、私たちは彼らのおかげで神の声を聞くことができるのである」（プラトン『アイオン』）

エロチックな神秘主義の場合、事態はあいまいで、神との結合、つまり集団との結びつきは性的活力の過剰の中に深く根をおろしている。したがって、有限性の刻印を押された愛の対象では満足できず、神秘家は、全てを象徴するもの、すなわち〝神〟を介して互いに関係を結ぶことを求めるのである。エロチックな神秘主義が厳密な意味でバッカス的解放の中に落ち込むのは驚くべきことではないのである。

民衆の熱情が修道院や聖人達が生きていた場所に向けられるのは、この意味で有益なのである。人々が崇拝するのは、全的なものと全てに対するこの昇華された愛の結晶化し現実化したものであって、それは日常生活の中で、偶然的な事実から生じるものではない。これと同じ部類に属するものに、偉大な愛人や遊び人に向けられる大衆の讃美があり、これは瑣事が束縛している社会の、エロチックな欲動のあらわれであり、または、そうした欲動を具現化しているのである。

そこから、噂のタネになるような道楽者に有利な、常軌を逸した寛容さが出てくるといえる。小さな男の子を次々愛し殺したジル・ド・レから、〝マッセンメルダー（大量殺人鬼）〟にして女たらしであったデュッセルドルフの吸血鬼にいたるまで、そこには〝霊感を受けた無軌道〟というべき事例の長いリストができる。彼らは、神的・社会的なもの、すなわち魅惑されていると同時に魅惑しているものの原因とともに結果でもある。

〝神聖なる喜び（fruito Dei）〟というのは象徴物につきまとう効力全てを発現させて象徴的に理解することを意味するが、こうした喜びと快楽は、世俗的である以前に、まず神聖にして集団的なものなのである。そして喜びは、個人的・合理化された次元を超えていったところで、神秘主義が説き明かしているディオニソス的な深い根をおろしているのである。神秘主義家が使う用語には、エロチックな言葉が浸みついている。――恋人、愛人、夫、婚約者等々の言葉がイエスのことをあらわすのに用いられる。

W・シュバルトは、神秘主義の様々な領域の中で、こうした愛と優しさをあらわす言葉にかかわるものを指摘している。

ジェロームは説く「キリストを愛し、つねにその抱擁を求めよう」と。聖ベルナールは、周知のように、ソロモンの賛歌を、彼流のやり方で解釈している。つまり神を〝恋人〟、人間の魂を〝愛人〟というようにである。女性神秘主義家クリスチーネ・エブネルは〝初夜の床の新郎のように、欲望にあふれて〟キリストに近づくのである。あるいはまた、マグデブルグのメチルデは、こうキリストに呼びかけている。

「主よ、私を強く愛してください。たびたび、そしていつまでも愛してください。私はあなたを欲望に燃えて求めます。あなたの熱い愛は私を、いつでも燃え立たせます。……私は裸の魂にすぎません。あなたは、私の魂にとって、豊かに着飾った主人であられます」

時間をかければ、例は幾らでも挙げられようが、ここに引用した文献以上にエロチックなものは、文学が我々に提供してくれる最も美しい愛の告白にも見られない。聖書の中にも、露骨な表現が見られる。エゼキエル書で

はヤーウェ神とイスラエルとの結婚を祝っている。ユダヤ教のハシディームの神秘家達は〝信仰心厚き者は、恋人が愛する女主人を見るのと同じく、素裸の神を見る〟と言っている。

神秘主義家達の愛の陶酔の中では全てが快楽であり、私達は、それ自体で充足しており、社会的仕組みの中に毛細血管として隠れているエロスを集め、結晶化する喜悦の世界の中にいるのである(聖アウグスチヌスは〝délicíae, suavitas, dulcedo Dei, delectatio summi boni etc.〟と述べている)。

しかし、この宗教的情動が単なる熱狂に変質する瞬間がある。古代ローマにおいて、恥じらいの女神の神殿が、次第に道楽者の集まる中心となったことを想い起こすべきである。そうしたことはデカダンスの時代には、大体起こってきたことと見てよい。そこで問題は禁欲が放蕩になるような転倒現象にあるのではなく、むしろ、禁欲として結晶するにせよ、放蕩としてあらわれるにせよ、行き過ぎたあらわれ方をすることにある。そのため、プロメテウス的基調の中には付随的にあったものは、以前からの価値に付随してもっていた高音部を失うことになるのである。それは社会的想像世界の〝昼の体制〟と〝夜の体制〟との永遠の戦いである(D・デュラン)。

禁欲から放逸への移行のメカニズムは〝フリースト〟(ロシア語で鞭の意)のロシア派に特に典型的にみられる。彼らは苦行者の集まりであったが、そこから聖なる放蕩者が再編成されていったのである。このセクトについて私が参照した二人の著者(シュバルトと・デ・フェリーチェ)の記述は完全に一致している。こうした鞭打ち苦行者はダニラ・フィリポフに遡る。彼らは、性的禁欲を厳格に完全に課した。その第六の掟には、次のようにある。

「汝、結婚するなかれ。すでに結婚している者は、妻に対し妹に対するが如くせよ」

一連の苦行実践の目的は、肉体を罪にけがれたものとして服従させることにある。出産は天国を追放された者の最高の罪である等々、全てこの調子である。注釈者の言うところによれば〝はっきりしない理由のために〟このあと、この宗派は、まるで変わってしまう。男女が入り乱れて、裸で踊り始める。それは互いに〝兄弟〟であり〝姉妹〟として見るからである。性的関係も神聖なる愛という名のもとに権威づけられる。ただ結婚だけが最悪の過ちとされるのである。

「この性愛に固執する者も、結婚しなければ、罪を犯すことにならない。しかし、性愛に押し流されて結婚する者は、忌むべき過ちを犯したことになる」

結婚のみが罪である、それは皆のものである性を私物化することだからであるといっているのは興味ぶかい。ここにみられるのは、ディオニソス的宗教の考え方である。

祭礼は、まさしく血まみれの乱痴気騒ぎの儀式をもって展開し〝見境なしの集団的交接〟で頂点に達する。こうした集団を作ったのはキリスト自身であるとされることから、この祝典は〝キリストの愛の儀式〟と呼ばれる。正教会はこうした狂信者達を糾弾し、彼らの儀式を〝スウァルニージュ・グレーヒ〟つまり集団的罪悪と呼んでいる(もっとはっきりいえば〝一緒に寝る罪〟ということである)。

性別、年齢、血縁関係などを考慮することなく行われるこの宗教的乱交の結果として妊娠した女性は、等しく崇拝を受けることとなる。この妊娠した女性の身体または彼女から生れた子供に様々な血みどろな儀式が施されることは、宗教的乱痴気騒ぎにおいては死と生が密接に絡み合っていることをあらわしている。

このエロチックで血みどろの祭儀が多くの信者を引きつけ、集団的な祭儀とは別に、寺院の小房でまでも愛の祭式が行われるようになっていったことが明確に示せる。

同じ記述をしている別の宗教史家は、付け加えて、この乱痴気騒ぎの集まり、いわゆる〝共通の罪〟が〝ラデニジェ〟と呼ばれたことを述べている。ラデニジェとは〝労働〟と訳される(フェリーチェ『狂熱の群衆—集団的エクスタシー』アルバン・ミシェル社、一九四七年)。

この懐胎した処女の子宮への崇拝について記されている内容は、身体の融合と混合が全ての神秘主義に浸みついている自然崇拝、宇宙的郷愁への崇拝を指向していることを、まさしく想起させるのである。乱痴気騒ぎは、

人々が自らを磨き、簡潔にして自然な人間となり、他者と〝他の性〟と融け合うことができるために自己に対して働きかける〝労働〟なのである。酒神祭はじつに多様であるが、その持っている意味は、まさにこの点にある。

フリースト派に関して観察される逆転は、しかしながら驚くべきことではない。そうしたことは人類史において、しばしば見られるところであり、マルグリット・ユルスナールは〝黒の作品〟中でその一例を挙げているが、農民戦争の時代のミュンスターの町は、またもう一つ別の例である。そして、エロチックで度外れの神秘主義の仕組みの中で〝不足〟(禁欲)が〝過超〟(放逸)に時として変わることはまったく当り前のことなのである。長期間修行している苦行者は、その繊細で神秘的な感覚的欲望を実現化しているので、肉体の支配のために注いだ、かくも大きなエネルギーを色欲に傾け、熱烈な情人または道楽者になりうることは周知のところである。

キリスト教の伝統における酒神祭的神秘主義者について語れば、一つの歴史書ができるであろう。公的制度では、身体とその情念は抽象化されている。しかし通常、それらは、頂点に達した性的共同体の中で、突如あらわれるのであり、人々はそれを最も深刻な事態の場合しか認識しないか、法的に起訴された場合しか注意を払わない。

そうした例としては、四世紀から九世紀にいたるまで長命を保ったサバラ派という奇妙なユダヤ・キリスト教的セクトを挙げることができる。より古典的なものとしては、ニコラ派、カイン派、また十八世紀の〝ケーニヒスベルクの敬虔主義者〟、一九〇一年、イギリス・ハイブヴィルのクワター精神主義家達、同じくアダム派がある(シュバルトのリストによる)。

これを表現するとすれば、信徒を乱痴気騒ぎに引き込む宗教的熱狂、身体の結合によってあらわされる神秘的快楽の強烈なものということになる。自説を自ら曲げるよう勤める福音書の助言によって、二世紀のアダム派(グノーシス的な)とか十三世紀のフランス・ピカルディ地方の人々のような酒神祭的宗派は、自らの性的本能に合わせて、狭い個性を捨てて、集団の〝絶対的他性〟の中に自己を滅却したのである。こうして得られた極快感のエクスタシーによって、彼らは神という〝他者〟に自らを一体化したのである。さまざまな状況を通して時々あらわれてくる、そして今日、特殊な出版物がとりあげる、通常の酒神祭が高く評価されるのは、こうした視点からである。

そこには、若者たちを互いに結合し、時間の経過の苦痛と戦うべく融合するよう差し向けるアスタルテのコンプレックスと呼んでよいものがある。ロベルト・ファン・グリクの古代中国における性生活に関する著書を参照すると、この問題はずっとはっきりする。この偉大な文化の国では、性愛の技術は一つの大きな役割をもっていて、そこには酒神祭的神秘主義が認められる。一種の古典的で、考えうる限りの洗練をもって、日常的エロチシズムは、〝寝室の技術〟と呼ばれる箇条書を並べ挙げた宝典によって営まれている。

ここで弁えるべきことは、この技術は不滅性を得るための精神的手段であるという点である。官能と理性と宗教的なものとを結び合せることによって、日々の生活の中における調和の道を開く秘伝を授けるのである。漢王朝の末期、西紀一八四年ごろに起きた黄巾賊の乱に由来する性的神秘主義は、この視点に立ってこそ、理解することができるのである。

この乱は、道教思想の影響で流血の中に沈んでしまったが、叛乱の指導者である張角の弟子たちは生き続けた。彼らに対抗した仏教徒たちは〝この狂信者共は集団的性行為に没頭し……男女の結合を図った〟と述べている。一世紀後、道教の本では、彼らを擁護して〝性的交渉は全ての罪を消滅させてくれる〟と論じている。こうして〝道家の人々は、みだらな行為を公然と行い……男たちと女たちは禽獣のごとく関係し合い、それによって災禍を逸らせる〟のである。官能的融合は一種の救済力をもっているのであり、社会的・自然的逆境に立ち向かう一つの手段なのである。

ファン・グリクは、また別の文献を引用して、道教の修道場が、こうした性的実践の特別な場所となっていたかを示している。五七〇年に道教から仏教に改宗した甄鸞(けんらん)はこう書いている。

「二十五歳のとき、私は道教の修業を志して一つの修

道場に入った。……そこで、まず教わったことは黄帝の書によって陰陽和合の実践をすることであった。……これは〝四つの目と二枚の舌〟をからみ合わせることである。……夫たちはその妻を交換し合った。全てそれは肉の悦びのためであった。彼らはそれを自分の父や兄の目の下でなすことも恥としなかった。それが〝生命のエッセンスを得る真の技〟と呼ばれるものであった」

集団的神秘主義と性的行為を密接に結びつけているこうした引用文は、幾らでも挙げることができよう。

この著者は、このエロチックな神秘主義がその後も永続して、多くの信奉者を集めていることを明らかにしている。この同じ実践例は、ずっと時代がくだっても見出される。一八三九年の勅令は完丹(教)と呼ばれる一派が、性的実践をカップルで行わせていたことを伝えている。「夕方になると、一つの部屋で大勢がカップルになって結ばれた。灯りは消され、闇の中で彼らは肉体関係をもったのである」。

同様にして、一八五〇年には、規格化された性的行為よりも集団的行為を選んで死を求めた狂信者たちが出たのである。

最後に、「奇聞」というタイトルで、一九五〇年、中華人民共和国になってからも、一貫道という道教の一派がその性的行為によって政府を怒らせたことが報告されている。そしてこれらの〝恥知らずの好色家たち〟の一派の首領たちは〝美人コンクール〟を行い、道教を隠れみのにして、メンバーをそそのかし、永遠の生命と無病息災が得られるといって、乱脈な肉体関係に耽らせていると述べられている(ファン・グリク『古代シナにおける性生活』ガリマール出版)。

このような好色の伝統があったことを知ってみれば、毛沢東思想のライバルたちが、その社会主義建設にあたって、同国人の性生活をまで計画化しようとしたことが理解できるのである。古代の専制政治は水を治めることから始まったといわれているが、性的エネルギーを治めることは、それによって他のもう一つのエネルギーを創始することができると考えられたのである。

確かなことは、道教の〝集団的関係〟と、今も認められるその多様な残影は真の道の探求をあらわしていると

いうことであり、そこでは、一つの共通の神秘の、かき立てられ言語化された結晶作用でもあるということである。そして、もし淫蕩な行いをしている修道場を寛大に認めるとするならば、それは精神的緊張が頂点に達すると、簡単にその反対のものに変わりうるということを認めることである。

いつの時代にも介在していた政治的動機は別にして、聖堂騎士団がそれに対して糾弾してきたのは、このような立場からであり、ジャック・ド・モレの〝告白〟にみられるのは、サドがその時代の放蕩な修道院について好んで書いているところと同じものである。事の真相はどうであれ、確かなことは、乱脈な祭礼が可能であったのは、論理的にいって修道院のような所であるということである。

聖堂騎士団の審問に付された一六三人の訴因の中をみると〝十字架を蔑ろにして汚物を塗りつけた〟冒瀆行為を別にすると〝男色〟が圧倒的に多いことがわかる。入会式のあと〝修練士(新入りの者)は先輩修道士に口づけをする。後者はそれを口に、ヘソに、そしてこれ以外の使い方に向けられていない部分にそれを受ける。そして最後に新入者は同僚たちのために自らを捧げることを宣誓する〟のである(R・G・ラコング『サドとその仮面』一九七四年、パイヨ版)。この文献を引用した注釈者は、サドはこの修道士の歴史本から影響を受けたことを、分かりやすく示している。

もし、この同性愛という〝幻想〟がサド侯爵の作品の中で一つの大きな役割を演じているとするならば、それは、修道院の恐るべき入会の神秘に生命を吹き込んでいたのは男色であったということである。聖堂騎士団、フリーメーソン、ある種の集会所を支配している破廉恥な言動、これら全ては〝不足〟と〝過超〟の論理を極点まで押し進めた人々にとっては魅惑的な香水であり、この悲劇的な論理の進展は、あらゆる社会的本能の歩む道筋であり、その行先は、淫蕩なるものと神聖なるものを結合しているディオニソス的神秘の中に入り込んでいるのである。

(ソルボンヌ大学教授)
訳・桐村泰次